

セラミック九州

佐賀県立九州陶磁文化館報

No.20

編集 1990・1・10
発行 佐賀県立九州陶磁文化館
代表者 牟田口 尚
〒844 佐賀県西松浦郡有
田町中部乙3100-1
電話 0955-43-3681
印刷所 山口印刷株式会社
佐賀県伊万里市二里町大
里乙3617



せいじ そうもんみつあしざら
青磁草文三足皿

館蔵資料

長崎・波佐見焼・三股皿山

17世紀前半

口径21.6cm 高さ5.2cm 高台径5.0cm

口縁を鐔状に作り、見込みに草文をヘラ彫りで入れる。高台径は小さく、高台から離れて三足が付く。全体に明るい青磁釉が施され、口縁部には辰砂釉を塗る。作行きは初期伊万里に似るが、波佐見・三股古窯出土陶片に同様の製品が見られ、同窯の製品と比定されるようになった。そして三股青磁に対する評価も高くなってきている。

〈行事報告〉

第15期・第16期陶芸教室

第15期陶芸教室（1989年6月3日～8月5日・講師は大宅利秋先生）、第16期陶芸教室（1989年8月19日～10月21日、講師は中村隆敏先生）が開催されました。

第15期の修了式の際、受講生を代表して福田幸次さんがお礼の言葉を述べられましたが、たいへん表現豊かな文章でしたので、ここに掲載することにしました。

第15期陶芸教室に参加して

福田 幸次

第15期陶芸教室の受講生の修了式にあたり、諸先生方にお礼の言葉を述べる機会を与えられましたことを光栄に存じます。

山紫水明すばらしい四季に抱かれ、谷間に肩を寄せ合いながら窯元と商家の並ぶ日本を代表する磁器の町有田町を一望できる立派な館。佐賀県立九州陶磁文化館で本年度の陶芸教室の受講生の募集がありましたのは、5月の初め頃ではなかったかと思います。

佐賀新聞紙上で拝読し早速申込みを致しましたところ、多数の応募者の中から受講生として選抜された私達22名は選ばれたことを誇りとして胸を張って6月3日から8月5日、本日の修了式の日まで延べ10日間にわたって、基礎教育、実践教育を学ぶことができました。その間、館長様をはじめ大宅先生、文化館の陶芸教室を担当されました職員の方々の懇切丁寧なる御指導を賜わり、初歩である土こねから形づくり、陶器の焼き上げまでの工程など初体験をさせて戴き、技術の面での基礎教育を身につけることが出来ました。

先生の御指導の下で自作した作品、形はどの様に変形していても自分で作った作品をじっと眺めていますと焼き物が生きている様に見えます。焼き物が動いて見えるのであります。衝動にかられて自分の作品が何とすばらしいことかと感じるのであります。この感動は私ばかりではないでしょう。受講生の皆さん方もそれぞれにそう感じとっていることと思います。

今や陶芸教室は県内の各地でも開設されておりますが、数多いその中でも佐賀県立九州陶磁文化館での陶芸教室は指導や技術の面では立派な先生が、施設など



お礼の言葉を読む福田さん

の面でも県内随一の折紙がつけられております。

受講生にとってはあこがれの的となっており、受講できたことを私達は胸を張り誇りとしております。

ここに來まして館長様とも面識ができました。直接指導を賜わった大宅先生や文化館の陶芸教室の職員の方々とも親しく面識もなかった今回15期生22名の受講生の皆さん方ともお互いに知り合い、親しくなり語り合うことができました。受講期間中の教室の中は楽しかったです。愉快だったです。明るい部屋の中でした。笑顔のたえない日々でした。そうしてきた中での本日の修了式、皆それぞれ離れ離れになって行きますが、習った陶芸の知識をこれからも充分發揮して作陶を続けて行く所存でございます。

陶芸をする人は皆人間としての修業を積まれた方、人格識見のそなわった方々ばかりです。それと言うのは受講生としての期間中私が感じたことですが、陶芸をするためにはねばりがなくてはなりません。所謂心掛けというか忍耐が要求されます。全知能を最大限に發揮しなければなりません。所謂集中力です。創作への意欲が必要となってきます。精神の統一ができ、心が磨かれてくることを知りました。陶芸教室で自分が作った作品の美しさ形の味を感じるとき、喜びにひたり酔ってしまう程でございます。こんなことを覚えたのも、勉強できましたのも、ご指導を下された大宅先生、諸先生方のお陰だと喜びにひたっているの

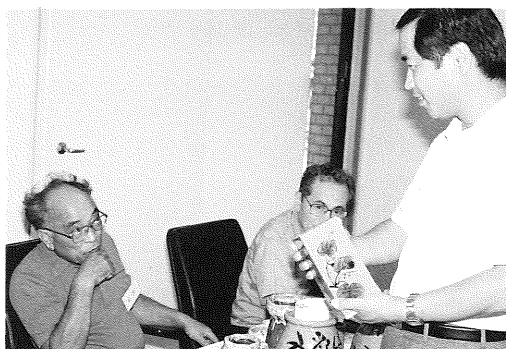
あります。陶芸の道は人間を作る情操教育の道場とも言えることでしょう。若さ溢れる万年青年として、これからは自らを磨きながら新しい時代の陶芸文化の発展のために尽して行きたい所存です。今回の受講ができました喜びを胸にひめ、諸先生方、受講生の皆様方とも今日限りで離れ離れになることはつらいことではありますがやむを得ないことでもあります。

館長様、大宅先生、文化館陶芸教室の指導に当たって下さいました職員の皆様方の御健勝と御多幸をいつまでもお祈り致しますのであります。

平成元年 8 月 5 日



15期のみなさん



15期の反省会



16期のみなさん

〈企画展より〉

九州陶磁デザイナー協会展

平成元年11月21日から26日まで、第1展示室において、九州陶磁器デザイナー協会展が開催されました。DAKT（ダクト）と呼ばれる、この陶磁器デザイナーの集団の始まりは、約30年も前にさかのぼります。佐賀県や長崎県の窯業試験場のデザイン室のメンバーや各企業で働いているデザイナー達の親睦と研修の集りでした。昭和35年から45年頃には、女性も加わり20名を越え、作品展を開くなど活動も活発でした。しかし、会としての形式はとらず、関心のある人達が自由に集り、話し、作品発表のできる場でした。

昭和63年に社会的にも活動しやすい団体として組織し、33名の会員の「人と仕事」を紹介した協会誌が刊行されました。この展覧会は、団体としての最初の、いわば披露目としての作品展です。会場には理事長の森正洋氏の作品をはじめ会員29名の作品が展示され、業界の関係者や一般の人たちが多数観覧され、関心の高さをうかがわせました。



展 示 風 景



展 示 風 景

〈速報〉

嬉野町吉田 1 号窯跡の調査

当館は、江戸時代、佐賀本藩の鍋島伝兵衛家領の窯場であった白岩山の吉田 1 号窯跡（藤津郡嬉野町吉田）の発掘調査を 5 月 29 日から 6 月 7 日に実施した。

この窯跡の歴史は、蓮池藩領の吉田皿屋（吉田 2 号窯跡など）より古く 17 世紀前半には開窯していたという説も強かった。しかしこれを証する確実な史料はなく、白岩山の存在を確実に示す史料は、幕末の絵図と、明治 14 年の『陶器製造沿革調』である。後者には「藤津郡吉田村字白岩山」の窯 1 登り、14 室とあり、窯焼としては宮崎、小原、大串、井上、石井の 5 人の名が記載されている。そして 1 ケ年の焼成回数は 4 回、製品種類は奈良茶碗・煎茶碗があげられている。前者の幕末の絵図には 9 室の登り窯が描かれている。

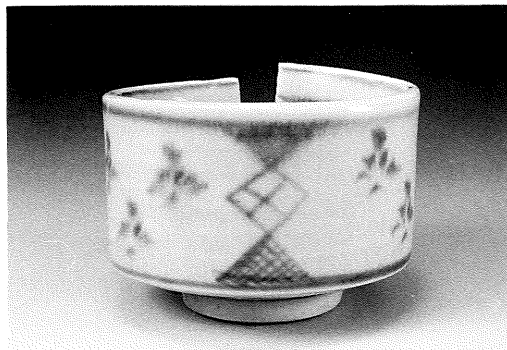
これより遡る史料としては有田の『皿山代官旧記覚書』文政 12 年（1829）に「上吉田山登」とある。中島浩氣『肥前陶磁史考』昭和 11 年に「中通一名上吉田」とあることから、この「上吉田山登」は中通りにある白岩山＝吉田 1 号窯の可能性が高い。この 1829 年の「上吉田山登」の記録には、近年、窯が大破し、窯焼達も大変困窮し、窯を焼くこともできないでいる。去年の冬以来、ようやく小窯 5 室を 2～3 回焼いたが、これだけではどうしようもないので、残る 5 室の焼成室を塗り替え（修築）たい。ついてはその資金を借りたいと有田皿山代官所に願い出た。それに対し、代官所は、この窯は地土（地元の陶石）を使用しており、さらに薪や水からうすなどの便利も良いので、資金を貸与する方針を打ち出している。

○発掘結果

窯本体は南から北へと登る階段状連房式登り窯である。地形からみて全長 60m を越す登り窯とみられる。このうち窯尻付近の焼成室 1 室を発掘した。保存状態は比較的良く、窯幅 8 m 5 cm、奥行 4 m 65 cm の大きな焼成室であることが分かった。窯の壁はレンガ状のトンバリを用いているが、一部砂岩質の石を基礎に用いている部分もある。

出土品は飯碗と湯飲み碗が主であり、型紙摺り手法で絵付けした染付である。年代は明治とみられる。

物原（失敗品などの捨て場）は窯の西（左）側にあ



1. 染付草文筒形碗 1780～1810年代
口径 7.1cm 高 5cm 底径 3.6cm



2. 染付縦縞に七宝散し文端反碗 1820～60年代
口径 10.6cm 高 6cm 底径 3.9cm



3. 染付唐花文端反碗 1820～60年代
口径 10.4cm 高 5.8cm 底径 3.8cm

る。南半分ではかなり大規模な土手を形成しており、長期間にわたる生産量の大きさを物語っている。この部分の調査では窯内で出土した明治の型紙摺り染付碗に加えて、江戸後期の染付碗類（写真 1～3）が沢山出土している。よってこの窯の操業年代は 18 世紀末から明治中期ごろと推測される。（大橋康二）

シリーズ

やきものにみる文様 (17)

荒磯文様

「荒磯」は「あらいそ」または略して「ありそ」とよむ。荒磯は荒波が打寄せる磯辺、浜辺の意であるが荒磯文様は波間におどる鯉をあらわした文様である。

「ありそ」ということばは古く、万葉集17・3959「かからむとかねて知りせば越の海の安里蘇の波も見せましものを(大伴家持)」に見え、「古今集」、「源氏物語」、「更級日記」などの平安文学にも用いられている。

江戸中期の国語辞書である太田全斎著『俚言集覧』には「荒磯古代切れ也、こい花色、もん、金にて波に鯉、太さ一寸余、黄段地銀らんもあり」というように「荒磯切」について述べている。名物裂の一つに荒磯鍛子がある。それは中国明時代の製といわれ、波間におどる鯉の文様をあらわしている。

波間に魚を配した文様のやきものとしては、宋時代の「影青刻花魚水紋碗」が知られている。その影響下に日本では「古瀬戸灰釉印刻魚文瓶子」などが作られた。

写真の作品は中国明時代末期に景德鎮でつくられたもので、タイ国のアユタヤ市内を流れるメナム川(チャオ・プラヤ川)から引き揚げられたものである。碗の見込みに波間の中央から飛びはねようとする鯉と、その上部に雲を描いている。

この図柄をそっくり写して1640年代に有田皿山で碗を作り、東南アジアへ大量に輸出された。それらの中には本歌である中国製品を写すうちに、もはや「荒磯文」とは判別しがたい程、絵文様がみだれたものがある。

江戸後期、京都の永楽保全の作った「二彩荒磯文水指」にはさすがに洗練された荒磯文様が盛り上げであらわされている。(吉永陽三)



青花荒磯文碗

タイ国・アユタヤ市出土 中国景德鎮窯・明時代末期

シリーズ

やきものの技法 (17)

刷毛目

泥漿にした化粧土を、刷毛で素地に塗る装飾技法。化粧土を施す方法は、泥漿の中に浸す粉引の技法と、泥漿を刷毛で塗る刷毛目がある。前者の場合は、むらのない無地ができるが、後者は刷毛塗りのむらが出やすい。このむらを意図的にしたのが、装飾技法としての刷毛目である。

褐色の素地に白い化粧土を施す技法は、李朝の粉青沙器に多く見られる。日本では、17世紀初頭に、唐津焼において刷毛目の作品が現われる。その後化粧土の技法は、日本各地の陶器窯で普及した。粉引と刷毛目は、化粧土を用いる点では共通しているが、その装飾的な効果においては印象が大きく異なる。全体を白く化粧することことが主である粉引に対して、刷毛目は全体に施すとはかぎらない。一部に塗ったり、化粧土で文様を描いたり、また刷毛目そのものを装飾として施す場合が多い。文様として描く場合は、手間のかかる象嵌文様の代用技法とみなされる。現川焼のように、洗練された刷毛目装飾となると、象嵌の省略化とは異なり、特有の表現が確立されている。

打刷毛目文
広口花瓶17世紀末～
18世紀後半
武雄古唐津

館蔵

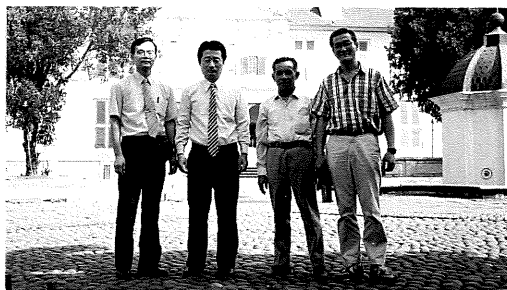
写真の花瓶は、白土の泥漿を刷毛で素地に打ちつけたもので、打刷毛目の名称がある。刷毛目の濃淡と繰り返しの文様には、象嵌文のような趣きがある。圏線状の文様は、刷毛塗りしたあと指などで押えて、化粧土を白く残したものである。全体を白く刷毛塗りしたあと、櫛状のヘラで線彫文を入れることもある。またロクロを回転しながら、波状の刷毛目文を施す大皿は、刷毛目の作例としてよく知られている。(鈴田由紀夫)

次年度特別企画展調査

インドネシア訪問記

昨年の8月11日から29日まで（館長は19日まで）、次年度特別企画展「海を渡った肥前のやきもの」の準備のため、牟田口館長・大橋資料係長・鈴木学芸員の3名で、インドネシアを訪問した。8月12日の夜、ジャカルタ空港へ着いたが、ブディアルジョ御夫妻の出迎えを受けた。ブディアルジョ・リング夫人は、日本とインドネシアの文化交流に尽されている方で、我々も様々な面で協力をしていただいた。今回の訪問の目的は、インドネシアへ輸出された肥前のやきものを調査し、次年度の展覧会への出品交渉をすることである。各博物館や行政機関へは、ジャカルタ国立博物館の元陶磁部長アブ・リド先生に同行していただいた。各博物館を訪ねると、職員がみなアブ・リド先生を敬愛しており、調査や交渉をスムーズに進めることができた。調査したのはジャカルタ市内の博物館や進藤コレクションのほか、ジャカルタから車で約2時間西へ走ったところにあるバンテン遺跡博物館や、スラウェシ島のウジュンパンダンとバルの博物館である。バンテンの王宮跡とジャカルタのパサリカン遺跡から出土した肥前磁器は、17世紀後半から18世紀にかけての輸出陶磁の貴重な資料として、学術的な価値の高いものであった。インドネシアでの伝世品と出土品が数多く確認され、次年度企画展の調査としては、大成功であった。

(鈴木記)



ジャカルタ市立歴史博物館にて
(左から大橋、牟田口館長、アブ・リド氏、進藤氏)

タイ・インド訪問記

平成元年10月16日から11月1日までタイとインドを訪問した。一行は久間教育次長、大橋資料係長、そして私。タイでは国立博物館員のブジョン・チャンダビ

氏の同行案内によりバンコク市内の国立中央博物館、国立考古学研究所、(財)ジム・トンブソン記念館。アユタヤ市内のチャンドラ・カセム国立博物館、チャオ・サムフィヤ国立博物館、アユタヤ王宮遺跡、考古室。ナコン・シ・タマラート市内のナコン・シ・タマラート国立博物館、プラムハタート寺院等を視察した。久間次長帰国後、大橋係長と私の2人でインド行き。デリー市内のレッド・フォート考古博物館。ボンベイ市内のプリンス・オブ・ウェールズ博物館。ハイデラバード市内のサーラル・ジャング博物館、ゴルゴンダ城。再びデリー市内の国立博物館。プラナ・キラ。そしてアグラ市内のタージ・マハール等を視察した。

タイはメナム川（チャオ・プラヤ川）の川底からぞくぞくと輸入陶磁器（中国産・肥前産）が引き揚げられている。とくにアユタヤ市内のチャンドラ・カセム国立博物館、これはもとアユタヤ王朝歴代皇太子のための宮殿であったそうだが、ここが現在の博物館である。この床下の倉庫には川から引き揚げたままのおびただしい数の陶片が納められていた（写真参照）。大半は中国の明末から清朝のものである。その中に70個程の肥前磁器が混在していた。碗の見込みにかなりデフォルメされた「^{ありもん}荒磯文」が描かれている。外面の胴前後にはこれまたデフォルメされた龍と鳳凰が描かれている。「富士山を描いているのか？」と尋ねられたので「波間から鯉が飛びはねている絵だよ」と説明したことだった。

(吉永記)



アユタヤ市チャンドラ・カセム国立博物館にて

利用案内

開館	午前9時～午後4時30分 月曜休館 年末年始(12月28日～1月4日)休館
観覧料	一般200円(150円)／大学・高校生150円(100円)／中・小学生70円(50円)／()内は20人以上の団体料金。但し、特別企画展の場合は、その都度に定めます。
交通	佐世保線有田駅下車徒歩15分